大学におけるライティング指導の諸問題

報告者
谷　美奈　（帝塚山大学 全学教育開発センター 准教授）
北野　収　（獨協大学 外国語学部 交流文化学科 教授）
山本　啓一　（九州国際大学 法学部 教授）

コーディネーター
坂本　尚志　（京都薬科大学 薬学部 一般教育分野 講師）

参加人数
42名

論理的思考力と表現力を身に付けた学生を育てるために、ライティング・スキルの効率的指導を行うことは大学教育において不可欠である。しかし、こうした現状認識にもかかわらず、ライティング指導については各教員の努力と模索による部分がいまだに多い。本分科会では、初年次教育、専門教育、キャリア教育という三つの観点から、報告者にそれぞれの実践を報告していただき、その上で、大学におけるライティング指導における諸問題を明らかにし、考察を深めることを目指す。現在の大学が直面するライティング指導の諸問題を多面的に提示するために、フロアも交えての実践報告・討論を行い、情報交換や認識の共有を深めていくこととしたい。また、事前アンケートなどによって、参加者のニーズを十分に把握し、当日の議論をより有益なものとしていきたい。

〈第 10 分科会〉

大学におけるライティング指導の諸問題

1. 分科会の趣旨

論理的思考力と表現力を身に付けた学生を育てるために、ライティング・スキルの効率的指導を行うことは現在の大学教育にとって不可欠な目標である。本分科会では、初年次教育、専門教育、キャリア教育という三つの観点から、報告者よりそれぞれの実践を報告していただき、大学におけるライティング指導における諸問題を明らかにし、考察を深めることを目指した。また、報告者による実践報告にとどまらず、現在の大学教育が直面するライティング指導の諸問題を多面的に提示するために、グループワークによって、情報交換や認識の共有を深めていくことも試みた。

2. 報告の概要

午前の部では、コーディネーターによる分科会の趣旨説明および報告者紹介を行った後、3 名の報告者よりそれぞれの実践について報告いただいた。午後の部では、参加者を事前アンケートの結果を踏まえて 9 グループに分け、ライティング指導に関するコースデザインあるいは研修デザインを共同で作成するというグループワークを行った。最後に、各グループのプロダクトを参加者全員の前で発表し、議論の成果を共有した。分科会は 15：30 に終了した。

第一報告者の谷氏からは、「文章表現教育の可能性―自己省察としての文章表現『パーソナルライティング』を事例として―」と題して報告いただいた。谷氏はまず大学生の文章力低下の原因として自己認識、世界認識の起点としての〈私〉の機能不全が存在すると指摘した。それを解決するための手段として「書く」ことの重要性を確認し、その実践例として、谷氏が独自に研究開発を進める「パーソナルライティング」の理念とその実践例を紹介した。学生は自己を基点に、自らの内面にある感情や思い、記憶や経験を言語化することを目指し作文する。さらに粘り強い推敲のプロセスを経て作品化（＝「エッセー」）をはかる。この過程において教員との対話や朗読会、相互批評や文集発行が並行して行われ、学生は、読み手である他者に向けて自らの作品を差し出す。ここではじめて、作者が他者へと開かれた存在へと変容していく。谷氏の報告では、授業で実際に執筆された作品の内容分析を行いつつ、「書く」ことを通じて「学びの主体」が形成されていく過程が描き出された。

会場からは、学生の作品から優秀なものを選択する基準は何かという質問が出た。これに対しては、優秀作品選択は、基本的に複数の教員によるルーブリック評価によるものであるが、学生の自己効力感の向上や、独創的テーマでの作成の奨励を目的とした授賞作品の選択も同時に行われていることが述べられた。

第二報告者の北野氏からは、「専門教育の集大成としてのライティング指導―対話と学びあいを通じた卒論指導の試み―」と題して、卒業論文作成に向けた 3、4 年生合同のゼミナールにおける実践について報告いただいた。ゼミの目的が、単に質の高い論文を書くことを目指すだけではなく、ゼミというコミュニティにおける学びあいを通じて、執筆の過程における自己の成長を実現することにあることがまず示された。ライティング指導はこうしたコミュニティにおける学びの一要素として理解される。問いにたどり着くための教員と学生の対話と問答、学生相互の教え合い、そして論文作成のためのさまざまな技法を学ぶワークショップといった実践の詳細が紹介され、それらを可能

にする環境としての学びのコミュニティづくりの重要性が明らかにされた。こうした共同作業の成果として文集作りが行われ、同級生だけでなく、先輩、後輩にも配布されること、そして文集が後輩に教科書として使用されることによって、卒業論文の執筆がコミュニティ全体の「学びの機会」となり、結果として文章表現能力の学年をまたいだ底上げがなされていることが示された。

会場からは、卒論指導と就職活動の兼ね合いをどのようにしているのかという質問が出た。これに対しては、3年生の12月以降のおよそ半年間は卒論禁止令を出し、就職活動に専念してもらい、内定後に再開するという方法をとっていることが説明された。また、就職活動による休止期間に備えるためにも、3年生の早い時期からの準備が重要であることも言及された。

第三報告者の山本氏からは、「キャリア教育から見た文章表現科目―九州国際大学法学部の事例から―」と題する報告をいただいた。まず、ジェネリックスキルを持った学生を、企業が求めているという現状が確認された。エントリーシート、面接など就職活動のさまざまな段階において、ジェネリックスキルを持っていることを学生自身が説明できるために、言語能力は必須のメタ認知能力である。警察官を目指す学生が多い九州国際大学での事例をもとに、課題解決力（リテラシー）をいかに育成していくかという問題が考察された。文章表現科目の重要性は、リテラシー養成の中で重要な役割をはたしており、特にプロセス・ライティング習得のためには初年次科目からの組織的取り組みが必要であることが強調された。

会場からは、文章表現の授業についてこられない学生に対してはどのように対処しているのかという質問があった。これについては、一定程度ついてこられない学生がおり、現在は補講によって対応しているとの回答があった。次に、表現のための語彙、概念が絶対的に不足している学生に対しては、文章を読ませることも必要ではないかとの指摘があった。これに対しては、アウトプットのためにはインプットが必要であることが確認された後、学生にとって身近なテーマに関する文章を、ジグソー法を使ってグループで学習させるなどの試みが紹介された。

3. グループワークの概要

午後の部では、各報告者にファシリテーターを務めていただき、グループワークを行った。まず、コーディネーターより趣旨説明、グループ分けの確認を行った後、「初年次教育・専門教育・キャリア教育のいずれかの分野に特化したライティング指導のためのコースデザイン、研修プログラムのデザインを作成し、発表する」というタスクに従って、9グループに分かれて参加者に作業をしていただいた。グループごとに自己紹介をした後、各大学の事例紹介なども行いつつ、タスクに取り組むこととなった。1時間20分程度のプロダクト作成時間の後、ホワイトボードシートに作成したプロダクトを、全参加者の前で発表した。プロダクトは写真撮影し、後日参加者にメールで送信し、共有することとした。最後に、3名の報告者の方からコメントをいただき、分科会を終了した。

4. まとめ

ライティング教育に対して、初年次教育、専門教育、キャリア教育という三つの観点からの報告をいただき、それに基づいて参加者相互での情報交換を促すことが本分科会の目的であった。学びの主体形成やコミュニティ作りなど、異なる領域でのライティング指導の実践から見えてきた共通点もあり、非常に有意義な事例報告をいただけた。また、午後の部ではそうした報告にもとづきながら、各参加者が抱えるライティング指導の問題点について意見交換をし、その上で共通のタスクに取り組んでいただくことができた。専門領域、バックグラウンドを同じくしない参加者同士でのプロダクト作成は、グループによってはかなり困難であったように見受けられた。しかし、お互いの議論やファシリテーターを務めていただいた先生方の効果的な介入によって、すべてのグループがそれぞれに特徴的かつ実効性のあるプロダクト作成に成功していたように思われる。事前アンケートのデザインの不備、進行の変更など、運営側として反省すべき点はあったが、報告者と参加者の皆様の熱意と問題意識に支えられ、熱気ある分科会となった。

大学コンソーシアム京都第19回FDフォーラム 第10分科会 大学におけるライティング指導の諸問題

2014年2月23日
龍谷大学深草キャンパス

分科会の趣旨

- 論理的思考力と表現力を身に付けた学生を育てるために、ライティング・スキルの効率的指導を行うことは大学教育において不可欠である。
- 本分科会では、初年次教育、専門教育、キャリア教育という三つの観点から、各登壇者の実践を報告していただき、大学におけるライティング指導における諸問題を明らかにし、考察を深めることを目指す。
- 現在の大学教育が直面するライティング指導の諸問題を多面的に提示するために、グループワーク等の手段によって、情報交換や認識の共有を深めていくこととしたい。

報告者紹介（報告順）

- 谷美奈 先生
  - 帝塚山大学　全学教育開発センター　准教授
- 北野収 先生
  - 獨協大学　外国語学部　交流文化学科　教授
- 山本啓一 先生
  - 九州国際大学　法学部　教授

（コーディネーター）
- 坂本尚志
  - 京都薬科大学　一般教育分野　講師

分科会の流れ（概略）

- 10:00～12:00
  - 各報告者による実践報告
- 12:00～13:30
  - 昼休み
  - ポスターセッション・コアタイム
- 13:30～15:30
  - グループワーク、プロダクト発表

分科会の流れ（午前の部）

- 10:00～10:05　趣旨説明（コーディネーター）
- 10:05～10:40　初年次教育（谷）
- 10:40～11:15　専門教育（北野）
- 11:15～11:50　キャリア教育（山本）
- 11:50～12:00　質疑応答

分科会の流れ（午後の部）

- 13:30～13:35　趣旨説明
- 13:35～13:50　自己紹介、役割分担（司会、記録係、タイムキーパー）
- 13:50～14:40　プロダクト作成
- 14:50～15:10　各分野でのプロダクト発表（各グループ3～5分）
- 15:10～15:30　各分野より一つのプロダクトを発表（各グループ5分程度）

プロダクトについて

- 作成したプロダクトは、写真撮影し、後日事務局を通じて参加者に配布いたしますこと、ご了承ください
- プロダクトに、公開できない情報等を記載されないようご注意願います

役割分担・事例報告(15分)

- 最初に、グループ内での自己紹介をお願いいたします
- 次に、グループでの役割を決定してください
  - 司会
  - 記録係（ホワイトボードシートへの記入を担当）
  - タイムキーパー
- 各大学におけるライティング教育の現状と課題について情報交換してください

プロダクト作成(50分)

- 初年次教育、専門教育、キャリア教育の各分野に特化したライティング指導のためのコースデザイン、あるいは研修デザインを作成してください

プロダクト発表（分野別）(20分)

- 各グループ3～5分程度で、プロダクトを発表してください

プロダクト発表（全体）(15分)

- 初年次教育、専門教育、キャリア教育の各分野から、それぞれ1つのプロダクトを全体発表してください

文章表現教育の可能性
―自己省察としての文章表現「パーソナルライティング」を事例として―

帝塚山大学 全学教育開発センター 准教授　谷　美奈

2013年度第19回FDフォーラム 社会を生き抜く力を育てるために
第10分科会 大学におけるライティング指導の諸問題

文章表現教育の可能性
――自己省察としての文章表現「パーソナルライティング」を事例として――

たに みな
帝塚山大学全学教育開発センター

CONTENTS

Ⅰ. 文章表現教育の現代的意義

Ⅱ. 目標達成へのプロセス
（1）自己省察としての文章表現「パーソナルライティング」の理念と実践
（2）自己省察としての文章表現「パーソナルライティング」の授業と特徴

Ⅲ. 〈自己〉と〈世界〉の架け橋
（1）自我像のプロトタイプ
（2）自我像の変化
（3）他者に媒介される自己
（4）A君の変化

Ⅳ.おわりに

Ⅰ. 文章表現教育の現代的意義

Ⅰ. 文章表現教育の現代的意義

● 初年次教育におけるリテラシー教育（読み書き能力）の特徴

レポートの書き方、論文の書き方などのアカデミックスキル、すなわち、専門学術的知識やスキルの提供など、**教育上の有用性をねらい**として取り組んでいる。

だが……

Ⅰ. 文章表現教育の現代的意義

●もしも、テクニカルな意味における文章指導に限定されているとすれば、文章表現教育の現代的意義は見失われる……！？　恐れがある。

大学生の文章力低下を追求すれば、〈自己〉と〈世界〉にまたがる認識の起点としての、**〈私〉**がうまく機能していない。

すなわち、

学びの主体の未形成

という問題につきあたる。

Ⅰ. 文章表現教育の現代的意義

●イヴァン・イリイチ（1991）
現代の若い世代（CPリテラシーの世代）に顕著な現象

米国のある高校教師が「南サハラにおける旱魃と飢餓」に関するレポートを課した。生徒たちはテーマに関するキーワードをCPに入力し、そこから情報を抽出し、それらを上手くつなぎ合わせてレポートを提出した。教師は、そのレポートが無味乾燥であったため、生徒の一人に「南サハラで起こっている旱魃と飢餓について君自身はどう考えるのか？」と尋ねた。するとその生徒は「質問の意味が分からない」と答えた。

ここで注目したいのは、CPを使ったかどうかではなく、

あるテーマについての論述を行うことを、**情報操作に還元してしまうような「精神の態度」**

第10分科会

Ⅰ. 文章表現教育の現代的意義

彼らにおいて主体として考えられるような〈自己〉に対しても〈世界〉に対しても起点となるべき〈私〉が機能していない。

学びの主体の未形成
という問題

この課題解決の
有力な手掛かりとして、
自己省察としての文章表現
＝
パーソナルライティング
の教育実践に着目！

Ⅱ. 目標達成へのプロセス

Ⅱ. 目標達成へのプロセス

●「パーソナルライティング」の教育理念

高等教育における〈私〉と専門学術的な著しい乖離

「書く＝考える」ことが、外在的・形式的に強制された、こなされるべき義務でしかない。

「書く＝考える」ことが、内発的な学びと表現への模索や思考に「結びつきにくい」状況がある。

ハウツー的な技術の伝授でも、専門知識の注入でもなく、
「書く＝考える」ことが、
学生の内発的な学びや動機のきっかけになるように！

Ⅱ. 目標達成へのプロセス

●「パーソナルライティング」の教育理念

✎日常的な出来事や生活体験を題材にする。
経験における感覚の感受を「掘り下げ」HOW?
経験の意味の「とらえ返し」WHY? をめざす。

✎頭の中や胸の内にある未定形であいまいな思いに言葉を与える。
自分がどのような感受性や価値観をもつ人間かを確認する。

✎確かめられた言葉や表現を他者と交換しようと努力する。
他者・社会・時代への関心につながり、
専門課程への学びへと接続する。

Ⅱ. 目標達成へのプロセス

●「パーソナルライティング」の実践のあらまし

技術面を重視した文章技術指導や論文作成のための授業とは異なる特徴

✎特徴１：文章ジャンルとしてのエッセー（Personal Essay）
✎特徴２：内面の掘り下げ・HOW?／とらえ返し・WHY？
✎特徴３：自己を基点に、自らの内面にある感情や思い、記憶や経験を言語化
✎特徴４：粘り強い「推敲」で「作品化」
✎特徴５：他者に向けた作品制作（教員との対話、相互批評、自作朗読、文集発行）

Ⅱ. 目標達成へのプロセス

●授業の形態と特徴

課題テーマ（1200字～2500字程度）

〈私〉の発見

前期	
全体テーマ：「記憶に残っていること」	
第１クール	私がいた場所／私の居場所
第２クール	こころに残る人
第３クール	そのときの感情（きもち）
第４クール	私ハコウイウ人間デス／コウイウ私ニナリタイ

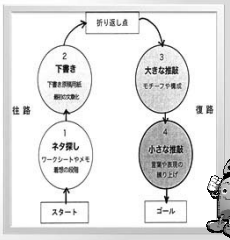
〈私〉との関係

後期	
全体テーマ：「○○と私」	
第１クール	言葉の経験
第２クール	魅力を解剖する
第３クール	感覚を伝える
第４クール	自由課題

Ⅱ．目標達成へのプロセス

●授業の形態と特徴

実習のためのコンセプトチャート　　推敲:「往路と復路」



Ⅱ．目標達成へのプロセス

●授業の形態と特徴

ワークシート作業　　メモ作り　　清書原稿→添削

Ⅲ．〈自己〉と〈世界〉の架橋

Ⅲ．〈自己〉と〈世界〉の架橋

（１）自画像（自我像）のプロトタイプ

作品資料１:前期第１クール「私のいた場所／私の居場所」

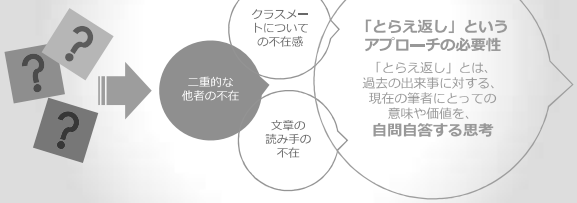
批評コメント

読んでいてよく分からない部分が多い。

なぜ、教室が居場所でなかったのだろうか？
A君は、クラスメートを困らせたかったのだろうか？

Ⅲ．〈自己〉と〈世界〉の架橋

（１）自画像（自我像）のプロトタイプ



Ⅲ．〈自己〉と〈世界〉の架橋

（２）自我像の変化

作品資料２:前期第２クール「こころに残る人」

批評コメント

自省と共に「気づき」がある。自身について詳しく書けるようになり、過去の自分を現在の自分の目で客観視している。故人と自分の関係の変化を辿る中、相手との関係が「掘り下げ」られ、友人の存在の意味が「とらえ返し」されている。A君の変化は、彼にとっての切実な〈他者〉の存在を発見しえた点に求められる。

佳作認定作品！

Ⅲ．〈自己〉と〈世界〉の架橋

（３）他者に媒介される自己

作品資料３：前期第３クール「そのときの感情」

批評コメント

過去の即自的な自己像を離れ客観的に自己を見つめ、自分の変化や成長を規定してきたものが常に「他なる者」との関係性のあり方だと気づいた。「失敗してもあきらめなければ、いつか前に進むことができる」という自信をもたらすことになった他者との触合いがこの作品のモチーフ。

佳作候補！

Ⅲ．〈自己〉と〈世界〉の架橋

（４）A君の変化

第１クール・4月（自画像のプロトタイプ）〈他者〉の不在

第２クール・5月（自我の変化）〈他者〉の存在を発見

第３クール・6月（他者に媒介される自己）〈他者〉との関係性のあり方に気づく

内向的で大人しかったA君はこの頃、授業においても変化を見せ始める。
他の学生の発表に自ら挙手して意見を述べるようになった。自作への手応えと共に、ほかの人の作品も関心の対象となったのである。
後期にグループワークが始まると、班メンバーの作品に積極的に批評を述べるA君の姿が見られた。他者を回避したかつての姿は想像もつかないものとなっていた。

「パーソナルライティング」とは、
「震災について、いまの社会や日本について考えよ」と問いかけるような教育実践ではない。

学生たちが自分の切実な実感に信を置き、しかも「なぜ、自分はそのように感じるのか？」
と自問自答するとき、その深度に比例して、
他者へ、社会へ、世界へ、
と射程を拡張する力が生まれる。

そのことを信じる文章表現教育である。

Ⅳ．おわりに

本発表は、文章表現をとおした「学生における自己認識の深化」「自己と世界の架橋」という理念の有効性について報告してきた。

初年次教育において、レポートや論文の基本形式を習得することはたしかに効率的であり、学びの基盤の一つとして捉えられる。

だが、果たして入学してきたばかりの学生に対して、何をどこまで書けるように期待して教えるのがよいのか。何が学びの基盤（レディネス）となるのか。

これらを見定めようとするときにたちまち浮上するのが、現代の大学生における「学びの主体の未形成」という問題である。

そのような問題を解決するため、〈私〉という存在、〈私〉らしさを、発見し深く認識する。

そういった自己省察的な文章にこそ、今日の文章表現教育の現代的意義がみいだされるのではないだろうか。

ご清聴ありがとうございました。
Thank you!

たに みな
avocatmina@tezukayama-u.ac.jp

専門教育の集大成のためのライティング指導
―対話と学び合いを通じた卒論指導の試み―

獨協大学 外国語学部 交流文化学科 教授　北野　収

１．学びの機会としての「卒業論文」

（１）書くことを通じて思考し表現することのみならず、それ以上の何かを知ること。

（２）知的体力の成長、ゼミ生同士の助け合い・チームワーク、達成感・自信など。

（３）真剣に取り組むとなれば、学生にとって卒論は初めてかつ大きなチャレンジ。

↓

レベルの高い論文を書くことが主たる目的ではない。
「質」を過度に求めない。「質」はあくまでも結果。プロセス主義。

２．想定する「卒論」もしくはそれに準ずる研究

足掛け２学期またはそれ以上の期間にわたり、オリジナルの「問い」を手掛かりとして、収集した情報に基づいて「科学論文」のフォーマットにまとめあげていく作業。

３．やり遂げるために求められること

（１）理屈でなく、自分の思考や体験を通じて、「問い」について考え、たどり着くことの意味を知ること。

（２）作文、感想文，レポート、エッセイ（小論文）でない「論文」というジャンルの意味を知ること。

（３）文献の集め方・読み方、初歩的な調査手法や分析方法を知ること。

（４）書き下ろした原稿や図表に対して学生同士で講評し、より分かり易く、質の高い「パーツ」に改善していくこと。

（５）就活その他があるなかで、モチベーション（興味、関心、集中力、「孤独」との戦い）を持続させること。

４．学生の「潜在能力」を信じる

個人差はあるにせよ、学生の「潜在能力」は悲観する程低くない可能性（もちろん現場ごとに状況は異なる）。要は、いかに「その気にさせるか」「引き出すか」。そのための環境づくりは専門教育におけるライティング指導の前提条件。本来、ラインティング・スキルの指導だけを取り出して話をすることは適当ではない。ライティング指導は、次項の「**三位一体**」のなかに埋め込まれて存在する。

☆リサーチデザイン、論文作法について、教えられることはすべて教えてみる？

×教員側にそれだけの手間暇かける時間がない。

×学部生に教えても無駄。彼らには無理。

↓

効果的、効率的学習のための工夫

（教員との対話、集団学習での教え合い、個人の学習の相互補完）

５．卒論指導における「三位一体」

（１）問いにたどり着くまでの対話と問答→学生個人と教員の二人三脚

・相手（学生）の人と成り、「秘められた関心」を探る。

・テーマを模索している中での文献との付き合い方。

・問いにつながるテーマの練り上げには徹底的に介入。

（２）書くことの重要性と型の重視→学生相互の教え合い

○パワポは駄目、いきなり執筆させる。

○執筆しながら「思考すること」を知る。

（パワポの欠点）

・　内容や全体構造を理解せぬまま「体裁を整える」、「伝達」の道具としては優れているが、自身が「思考」する道具ではない。

・　Ex.作詞作曲（執筆、創作）の勉強と、歌唱演奏（プレゼン）の勉強は別物！

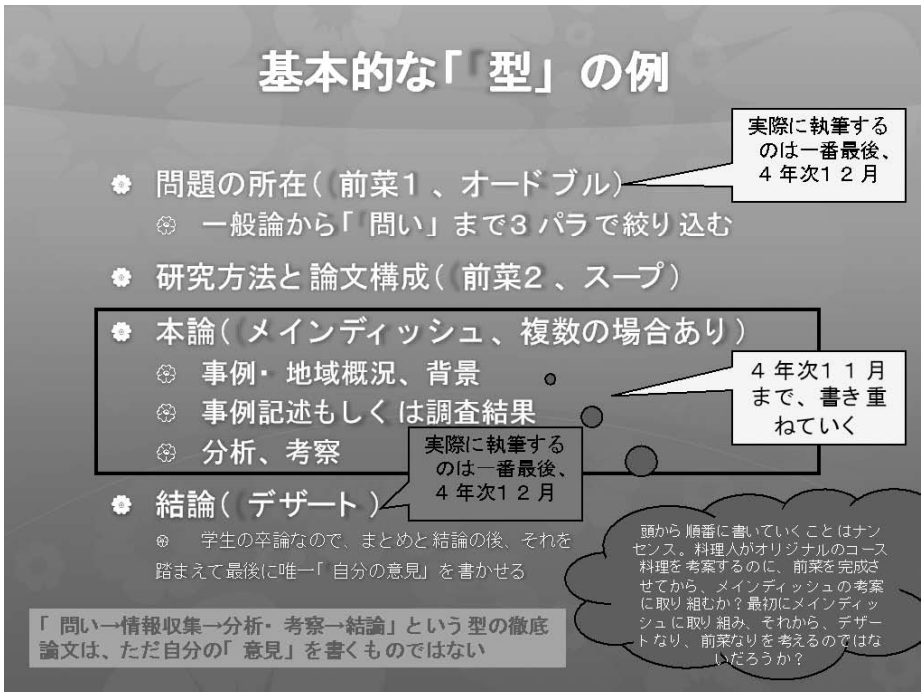
・　「調べる→写す→体裁を整える」という模倣的循環から、「書く→考える→

発見する」という創造的な循環へ。

・図表は引用するのでなく、自分で集めたデータで手作りする。

・引用ルール、文献リスト等定型的な部分は学生同士で教え合う。

・原稿を学生同士で読み込み、批評し、改善する。



（３）学びのコミュニティづくり→（１）（２）を可能にする環境

○教員学生間、学生同志の信頼づくり。

○工程管理とモチベーションのサポート。

・ ゼミは個人指導の領域に分類されがちな卒論指導において強力な役割。

・ 学生の効果的な動機づけ（learning effectively）、必要なスキルを会得する集団学習（learning efficiently）。

・ 特に最終学期に、同学年の学生同士の読み込み、相互批評＆添削ができるような信頼関係と知識・スキルの会得。

・ プロセスオリエンテッドの学び／単位のためではなく自分のために学ぶ／教員はファシリテーター。

○個人指導と集団活動の相補性とバランス

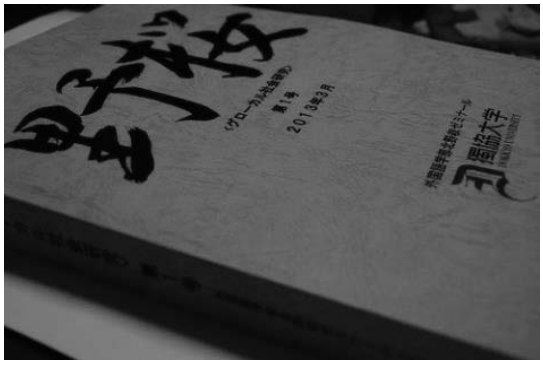
・ 個別指導という単独の情報伝達経路に頼るより、意欲に富む一部の学生から仲間へ、先輩から後輩へ、という学生間の教え合いを活用した方が、労力が節約できるだけでなく、「私もきちんとやらなくては」という主体性への動機づけの点からも効果的。

６．文集づくり：共同作業の成果を残す

・２年間かけて皆で１冊の「本」を作る→頑張りを形に。

・内容だけでなく体裁や標記の統一などの「編集」作業。

・文集は、１年上の先輩（指導のお礼）、次年度の３年次生、４年次生（サブゼミのテキスト）にも配布。

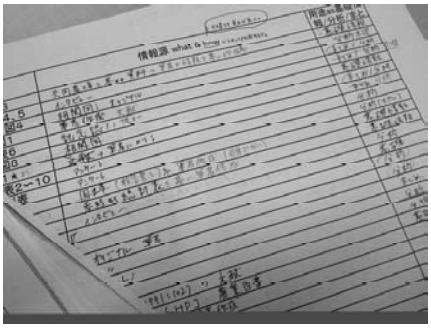


７．効果的、効率的な学びのためのワークショップ技法

（１）学年横断型ＷＳ

文献の種類を知るＷＳ

色塗りＷＳ（引用ルール）



図表の役割と使い方を知るＷＳ

過去の卒論に学ぶＷＳ／目次から論文の構成・構造を知るＷＳ／文献の探し方ＷＳ／添削ＷＳ

（２）最終学期４年次生のグループ活動

原稿の相互批評、書式、内容チェック（もちまわり式）

最終校正、論文集編集作業（文集編集委員が指導）

※能力の高い学生、意欲のある学生、細かいチェックが得意な学生などの特徴の発揮と有機的分業（＝コミュニティ、個人活動でなく集団活動という意識）。

８．最後に

「研究って、やってみると楽しいですね。」

「大変だったけど、先生のところで卒論やらせてもらって本当に良かったです。」

教師である前に研究者であること。しかも研究の喜びを学生に伝えられる研究者でなくては、きちんとした専門指導はできない（筆者の持論）。「教育か、研究か」という不毛な議論の止揚。

専門教育における ライティング指導

対話と学び合いを通じたゼミ・卒論指導の試み

獨協大学外国語学部
交流文化学科
北野　収
（開発社会学・NGO論）

実践の前提

- 学びの機会としての「卒業論文」
  - レベルの高い論文を書くことは目的ではない。質はあくまでも結果、プロセス主義。
- 想定する卒論もしくはそれに準ずる研究
  - 足掛け２学期またはそれ以上の期間にわたり、オリジナルの「問い」を手掛かりとして、収集した情報に基づいて「科学論文」のフォーマットにまとめあげていく作業。
- 学生の潜在能力を信じる：リサーチデザイン、論文作法について、教えられることを教えてみる
  - 教員側にそれだけの手間暇かける時間がない？
  - 学部生に教えても無駄？彼らには無理？

「三位一体」アプローチ

「ライティング指導」だけをとりだして単独で論じることはできない

- 問いに辿り着くまでの対話と問答①→学生と教員の二人三脚
  - 研究・執筆への動機づけ×教員との信頼関係＝やる気にさせる、やる気を持続させる
- 書くことの重要性と型の重視②→学生相互の教え合い
  - 型については上級生が後輩に教える
  - 同学年の学生同士の読み込み、相互批評＆添削
  - 教員の負担軽減
- 学びのコミュニティづくり③→①②を可能にする環境
  - 皆で１冊の本をつくることも目的

問いにたどり着くまでの対話と問答

- 学生の人と成り、秘められた関心を探る
  - 本当の「テーマ」は「形式的な題目」「（可視的・即物的な）題材」とは異なることを知る、教員との二人三脚で深めていけることも知る（学生）。
- テーマを模索している中での文献との付き合い方
  - この段階では、文献は読まないほうがよい→本当の「テーマ」（「問い」を伴った主題）は、文献の中ではなく、自分の心のなかにある好奇心、問題意識、個人的体験（怒り、悲しみ、喜び）にあるはず。
- 問いにつながるテーマの練り上げには徹底的に介入
  - 壮大な題目はNG、抽象的でもいいから、本人の問題意識の萌芽を見極める
  - 絞り込まれた、問うべき「問い」はこの先にあることを学生は知らない。

対話と問答（続き）

- 教員は、ひたすら「why?」を問い自問させる。
  - こたえは文献でなく、自分の中にあるはず。
- 本人が打ち込めるテーマ（題材）と意味のある問いを一緒に「探し当てる」。
  - 突き放さない。
  - 一緒に考える姿勢。
- テーマ決めにおける「自由放任」は不可。
  - 最終的には学生に「成功体験」を保証する（演出する）。
  - 研究者としての経験と勘がものを言うはず。

書くことの重要性と型の重視

- 構造と型と作法の重視
  - 問い、仮説、実証など「研究」の基礎要件、単なる「調べもの系レポート」との違い
  - 引用ルール、文献リスト、脚注などの論文作法についての徹底的な学習
- いきなり「パワポ／プレゼン」でなく「文章を書き下ろす」ことによって初めて知る「自分の頭で思考すること」の意味
  - パワポの欠点
    - 内容や全体構造を理解せぬまま「体裁を整える」、「伝達」の道具としては優れているが、自身が「思考」する道具ではない
    - Ex.作詞作曲（執筆、創作）の勉強と、歌唱演奏（プレゼン）の勉強は別物！
  - 「調べる→写す→体裁を整える」という模倣的循環から、「書く→考える→発見する」という創造的な循環へ

「型」の重視

基本的な「型」のパターン

- 問題の所在（前菜１、オードブル）
  - 一般論から「問い」まで３パラで絞り込む
- 研究方法と論文構成（前菜２、スープ）
- 本論（メインディッシュ、複数の場合あり）
  - 事例・地域概況、背景
  - 事例記述もしくは調査結果
  - 分析、考察
- 結論（デザート）
  - 学生の卒論なので、まとめと結論
    踏まえて最後に唯一「自分の

実際に執筆するのは一番最後、４回生１２月

４回生１１月まで、書き重ねていく

実際に執筆するのは一番最後、４回生１２月

頭から順番に書いていくことはナンセンス。料理人がオリジナルのコース料理を考案するのに、前菜を完成させてから、メインディッシュの考案に取り組むか？最初にメインディッシュに取り組み、それから、デザートなり、前菜なりを考えるのではないだろうか？

「問い→情報収集→分析・考察→結論」という型の徹底
論文は、ただ自分の「意見」を書くものではない

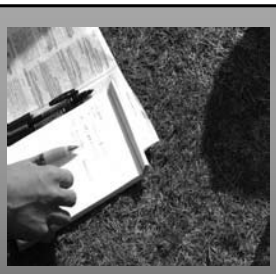
ゼミ＝学びのコミュニティ

- ゼミは個人指導の領域に分類されがちな卒論指導において強力な役割
  - 学生の効果的な動機づけ（learning effectively）
  - 必要なスキルを会得する集団学習（learning efficiently）
  - 特に最終学期に、同学年の学生同士の読み込み、相互批評＆添削ができるような信頼関係と知識・スキルの会得
  - プロセスオリエンテッドの学び／単位のためではなく自分のために学ぶ／教員はファシリテーター
  - 個人指導と集団活動の相補性とバランス
- 個別指導という単独の情報伝達経路に頼るより、意欲に富む一部の学生から仲間へ、先輩から後輩へ、という学生間の教え合いを活用した方が、労力が節約できるだけでなく、「私もきちんとやらなくては」という主体性への動機づけの点からも効果的。

集団学習の技法

- 基本的に毎回４回生２～３名をオーガナイザーとして指名、彼らに任せる。
- ３回生は毎回交代で、学んだ内容のメモを作成しゼミML に流す、ブログに概要と感想を書く（メモ役２名）。
- 学年横断型のWS
  - リサーチデザイン、論文作法、引用ルールなど
- ４回生同士のグループ活動
  - 批評、ロジカルチェック、推敲、添削、論文集編集など

詳細は『思考し表現するライティング指導のヒント』を参照。



学年横断型WSの例

①色塗りWS（引用ルール）
②文献の種類を知るWS
③過去の卒論に学ぶＷＳ
④目次から論文の構成・構造を知るＷＳ
⑤文献の探し方ＷＳ

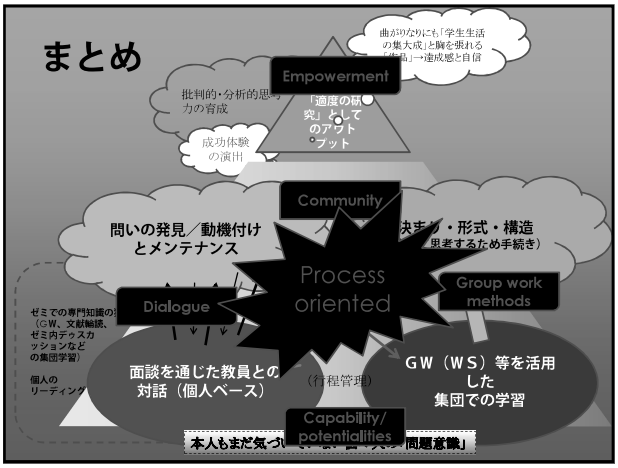
etc.

最終学期
４回生のグループ活動

①原稿の相互批評、書式、内容チェック（もちまわり式）
②最終校正、論文集編集作業（文集編集委員が指導）

※能力の高い学生、意欲のある学生、細かいチェックが得意な学生などの特徴の発揮と有機的分業（＝コミュニティ、個人活動でなく集団活動という意識）

まとめ



第10分科会

キャリア教育から見た文章表現科目　―九州国際大学法学部の事例から―

九州国際大学 法学部 教授　　山本　啓一

１．キャリア教育としてのライティング科目の位置づけ

・ 文章表現科目をキャリア教育から見ると、汎用スキル（ジェネリック・スキル）育成という観点は外せない。ジェネリック・スキルとは、OECD の「キー・コンピテンシー」や経産省の「社会人基礎力」、文科省の「学士力」の一部、時には「生きる力」として提唱されているスキルのことを指す。

・ OECD は生涯学習の視点から、「単なる知識や技能の習得を越え、共に生きるための力を身に付け、人生の成功と良好な社会を形成するための鍵となる能力概念」としてキー・コンピテンシーを位置づけた。このキー・コンピテンシーは、1）道具を相互作用的に用いる、2）異質な人々の集団で相互に関わりあう、3）自律的に行動する、という３つの観点から構成されている。「課題」「人」「自己」という３つの観点からスキルを説明しているという点において、キー・コンピテンシーは「社会人基礎力」を始めとする多くのジェネリック・スキルを包摂する概念でもある。

・ 九州・沖縄地域においては、「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」（産業界 GP）のもとで九州の企業を調査したところ、多くの企業は学生に対して職業的スキルや専門スキルよりも、ジェネリック・スキルを求めていることが判明した。特に、「コミュニケーション能力」「自主性」「チームワーク」「課題解決力」に対するニーズが高いことが分かった。

・ そもそも、キー・コンピテンシーや社会人基礎力は教室での学習を越えた広い意味のスキル概念である。言い換えると、これらのスキルは大学の授業を通じて育成されるとは限らない。育成のポイントが「体験」と「ふりかえり」、それに加えて「ロールモデルの意識」にあるとすれば、大学時代において、ゼミや PBL 型授業等が重要であるとしても、それと同じくらいアルバイトや課外活動などの経験も大きな影響を与える可能性は否定できないのである。

・ 企業は、採用面接時に「学生時代に力を入れたこと」を重要な質問項目とすることが多い。学生が最も力を入れた「（教室の内外を問わない）体験」を、「課題」「人」「自己」の３つの角度から掘り下げた質問をしていけば、学生のコンピテンシーを「見抜ける」というわけである。企業が学生に求める力がジェネリック・スキルである以上、その力がどこでついたかを問わないのは当然である。

・ 筆者のゼミでは、３年次の終わりにゼミ合宿を実施している。合宿では一人ひとりが、ゼミの勉強に限定されない「３年間の自分史」を仲間に対して語り、それに対してゼミの仲間が相互にコメントしあう、という一夜を過ごす。学生たちはお互いに長い時間をともに過ごしてきているため、自分について語っている学生が、実際にどういった行動を取ってきたか、その学生が他者からみたらどんな性格に見えているのかを的確に指摘できる。筆者からは、学生の経験を「課題」「人」「自己」の３つの角度から分析できるよう手ほどきをする。この合宿を経ると、学生自身の「ふりかえり（自己省察）」は相当深いものになり、それがエントリーシートや面接へと反映されていくのである。これが、長い時間を共に過ごしたゼミだからこそ可能となる就職活動支援であると考えている。

2．大学生のコンピテンシーに必要な日本語リテラシー

・ ただし、こうした「ふりかえり（＝体験の言語化）」においては、実は「言語能力」が大変重要になってくることに注目したい。どれほど豊かな経験をしたとしても、文章表現能力が低いと、ふりかえりが非常に浅い内容になってしまうのである。

・ つまり、大学生のコンピテンシーを高めるためには、経験やふりかえりの機会を充実させるだけでなく、逆説的ではあるが、言語能力・文章表現能力を育成する必要がある。大学生活全般の「経験」をコンピテンシーとして蓄積するためには、教室での学修を通じた文章表現能力の向上が不可欠となるのである。

・ また、九州の中小企業では、採用試験の中で小論文や作文を課す企業が増えてきている。口頭コミュニケーション能力といった対人スキルだけでなく、文章表現能力を問う企業が増えてきているとも考えられる。

・ 文章表現科目をキャリア教育からみると、文章表現科目を通じて育成すべき力とは、正しい語彙・文法で日本語が書けるようになることでも、業務文書が書けるようになることに限定されない。むしろ、最重要課題は、「自分の意見を述べるための知識、自分の意見を述べるための考え方（考える力）」の育成ではなかろうか。つまり、日本語リテラシーの育成が鍵となるのである。

3．九州国際大学法学部の事例

・ 九州国際大学法学部では、５年前から警察官育成を特色として打ち出している。警察官の業務やキャリアパスを詳しく見ればわかることだが、警察官とは特殊な職業ではない。多くの大卒警察官は、ジェネラリストとしてのキャリアパスが求められている。警察官には、特殊能力を習得する力ではなく、ジェネリック・スキルが要求されるのである。

・ 警察官の業務のうち、特に多くのウェイトを占める業務は「書類作成」である。だからこそ、警察官採用試験には必ず「小論文試験」が含まれるのである。

・ 福岡県警の小論文試験の過去問をみると、例えば平成 20 年度には、「現在の福岡県内の治安情勢を踏まえ、県民が福岡県警察に期待していることは何か、警察官となった場合、県民の期待にどのように応えていくかについて、あなたの考えを具体的に述べなさい」、といった問題が出題されている。福岡県警では毎年このような傾向の問題が出題されている。

・ この問題は、①治安情勢や県警の課題等の情報を知っているかという「情報収集力」、②それらの情報を理解・分析できているかどうかという「情報分析力」、③そうした情報をふまえた上で、当事者意識を持った課題解決策を提案できるかどうかという「課題発見力」や「構想力」、④そうしたプロセスを踏まえて導き出した自分の考えを 1000 字程度で論理的に表現できるかどうかという「表現力」、が問われていることがわかる。つまり、福岡県警の小論文対策試験においては、「情報収集」→「情報分析」→「課題発見」→「構想」→「表現」というプロセスをふまえて自分の意見を考え、その意見を論理的に主張できるスキルが求められているといえる。これは特殊なスキルではなく、一般的な「知識活用力」や「課題解決力」である。一言で言えば、福岡県警の小論試験は「日本語リテラシー」が求められているのである。

- だからこそ、本学部では、初年次の文章表現科目において、「与えられた資料を分析し、課題を発見・設定し、論理的な文章を構想でき、適切な日本語で自分の意見を主張できる、という日本語リテラシー（知識活用力／課題解決力）の習得をめざす」というねらいを設定しているのである。
- また、４年生向けの課外講座として「警察官採用試験小論対策講座」も実施している。この講座の内容も初年次の文章表現科目のプロセスとほとんど同じである。すなわち、「情報分析→課題発見→構想→表現」というプロセスをふまえた文章が書けることをねらいとしているのである。
- このように、本学部の文章表現科目は、学部のディプロマ・ポリシーを踏まえた上で、日本語リテラシーの育成を中心に据えて設計されている。それがキャリア教育から見た文章表現科目という意味である。

まとめ

- キャリア教育、つまり生涯学習的観点から文章表現科目をとらえた場合、「生きる力（コンピテンシー）」の育成が重要となる。
- コンピテンシーの育成のためには、「経験」と「ふりかえり」が重要であるが、実はふりかえりの深さは、「言語能力・文章表現能力」にかなり依存する。だからこそ、文章表現科目において「考える力（リテラシー）」の育成に焦点を当てるべきである。コンピテンシーは、日本語リテラシーを活用した自己省察の結果として蓄積されるという点を重視すべきである。
- 九州国際大学法学部で実施されている文章表現科目では、日本語を用いた知識活用力や問題解決力つまり、日本語リテラシーの育成が重要であると考え、そのような視点から科目を設計している。

第19回FDフォーラム
【第10分科会】大学におけるライティング指導の諸問題

キャリア教育から見た文章表現科目

～九州国際大学法学部の事例から

九州国際大学法学部
教授　山本 啓一

Mail: k-yamamoto@law.kiu.ac.jp

参考：「学力に課題を抱える大学における就業力の育成と課題―九州国際大学法学部の事例から」『日本労働研究雑誌』第629号、平成24年12月。
（独立行政法人 労働政策研究・研修機構のサイトよりダウンロード可能）

九州・沖縄地域の人材ニーズについて

リアセックによる人材ニーズ調査（221社）より

- 【新卒採用のポイント】従業員数が多い企業ほど、「筆記などの適性検査」「一般教養・常識」「基礎学力」を重視している。
- 【新卒採用の重視点】50～100名規模の会社を中心に「小論文・作文」を課す企業が九州では多い（増えている）。
- 【大学生に求める能力】コンピテンシーのうち、特に「対人基礎力」が求められている。従業員数が多い企業ほど（＋公務員）、「コミュニケーション能力」「自主性」「チームワーク」「課題解決力」が重視される。
- 【大学生に求める能力】「学び続ける姿勢」と「成長」はどの業種でも重視される（＝「現時点の能力」だけではなく「成長可能性」を求めている）。

→特定スキルよりも圧倒的にジェネリック・スキル（コンピテンシー＆リテラシー）が求められている。

→これらのスキルを自分が持っていることを説明するための「メタ認知能力（自己分析能力）≒言語能力」が必要。

九国大法学部の目標人材＝「警察官」とは何か？

警察官採用試験は、なぜ、長年「①教養試験」「②小論文」「③面接」「④体力試験」で構成されているのか？

① 警察組織の「幅の広い仕事（例：交番→捜査→防犯→総務→市町村へ出向→etc.）」に対応できるためには、「幅広い知識」を獲得し続けるための汎用的技能・学習能力（フレキシビリティ・訓練可能性）が不可欠

② 警察官にとって「書類作成能力（日本語リテラシー）」は必須

③ 警察官としての「適性」…「やる気」「倫理観」「自己管理力」「チームワーク」（対人基礎力／対自己基礎力…コンピテンシー）

④ 身体能力は警察官にとって必須の条件

＋α　新たな課題（検挙から防犯へ）…課題解決力等

→自分の「好き嫌い」や「得意不得意」で仕事を選べず、「目の前の仕事」で成果が求められるのが警察官（＝大卒人材）→ジェネラリスト

汎用的スキル（ジェネリック・スキル）

「社会において、どんな職業でも必要となる力であり、生涯を通じて伸ばしていくべき力」

○「生きる力」…周囲の環境とよい関係を築く力
- 別称…「キー・コンピテンシー」「社会人基礎力」など
- 育成方法…経験＋ふりかえり＋ロールモデルの意識
  →学生生活全般を通じて伸ばす力

○「考える力」…知識を活用して問題を解決する力
- 別称…「リテラシー」「課題解決力」など
- 育成方法…アクティブ・ラーニング、PBL等
  →授業を通じて育成する力

「コンピテンシー」の構成概念

- 教室での学習を越えた広い意味の概念（生涯学習的概念）。「経験」と「ふりかえり」が最大のポイント。「教室での学習」をこえた「学び」
- 「ふりかえり（自己省察）」の核となるのは「言語能力」…教室での学習を通じた文章表現能力が必要

	概念
対課題スキル「考え抜く力」	【課題発見力・計画立案力・実践力】→課題を解決する方法を考え、それを実行し、表現できる力
対人スキル「チームで働く力」	【親和力・協働力・統率力】→他者と良い関係性を築き、組織の中でコミュニケーションをとりながら、協働できる力
対自己スキル「前に踏み出す力」	【感情制御力・自信創出力・行動持続力】→自ら積極的に行動し、自分自身の行動を振り返りつつ、改善し続けられる力

経験 ＋ ふりかえり ＋ ロールモデルの意識

「ガクチカ」から見るコンピテンシー

「あなたは学生時代に何に力を入れましたか？」の意味

追加の質問内容	
・団体・組織の雰囲気作りのために何をしましたか？ ・団体・組織で動くためにどんなことをしましたか？ ・後輩をどのように指導したのですか？ ・対立が起きた時にどのように対処しましたか？	対人スキル 親和力・協働力・統率力
・団体・組織の中であなたはどのような役割を果たす人間だと思いますか？ ・困ったとき、落ち込んだ時にどのように対処しますか？ ・成功体験、失敗体験から何を学びましたか？ ・あなたが目標とする人はいますか？	対自己スキル 感情制御力・自信創出力・行動持続力
・自分なりにどのような目標をたてたのですか？ ・どんな計画を立てて目標にのぞみましたか？ ・その後、どんな改善をしたのですか？	課題解決力 課題発見力・計画立案力・実践力

大学での「ふりかえり（自己省察）」→エントリーシート作成支援

- 3年ゼミの終わりに合宿を実施
- 「3年間の自分史」を全員が語る。
- 「友人からのコメント」「教員の評価（＝長い時間をかけて見えてきた所見）」も伝える。

警察官小論試験が問う日本語リテラシー

福岡県警小論文試験より

平成20年度《第1回》…【時間】60分【字数】1050字以内

「現在の福岡県内の治安情勢を踏まえ、県民が福岡県警察に期待していることは何か、警察官となった場合、県民の期待にどのように応えていくかについて、あなたの考えを具体的に述べなさい。」

【出題のポイント】…「対課題型」治安情勢や県警の課題等の情報を知っているか（「情報収集力」）

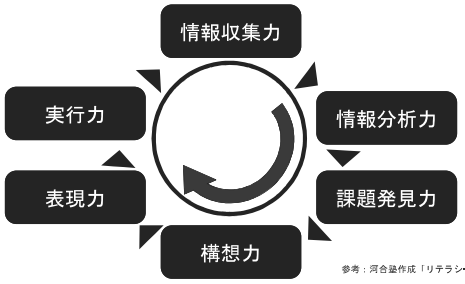
① それらの情報を理解・分析できているかどうか（「情報分析力」）

② そうした情報をふまえた上で、当事者意識を持った課題解決策を提案できるかどうか（「課題発見力」「構想力」）

③ 自分の考えを1000字程度で論理的に表現できるかどうか（「表現力」）

知識活用力・課題解決力（リテラシー）の育成

- リテラシー「問題を解決するために知識を使いこなせる力」とは、「言語能力」の中でも重要なスキル（ジェネリック・スキル）。
- 言語を用いた知識活用力を育成することが、「結果として」コンピテンシーや社会人基礎力等の「生きる力」を支えることになる。



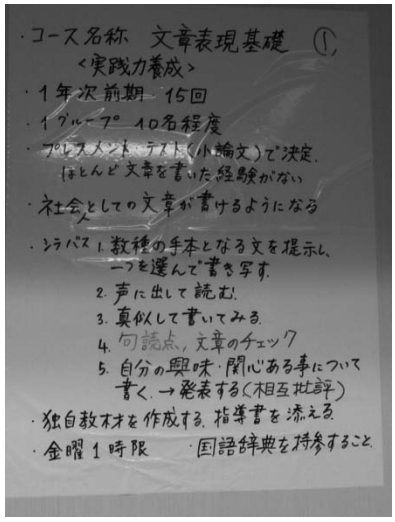
参考：河合塾作成「リテラシーマップ」

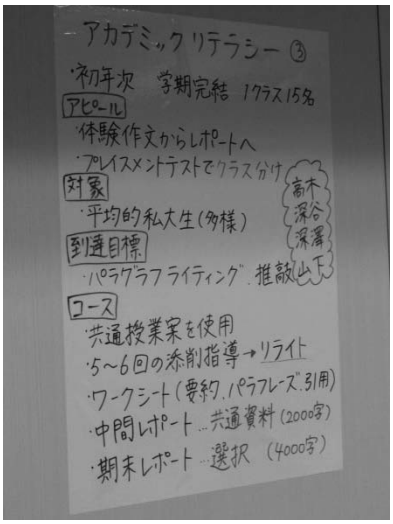
まとめ

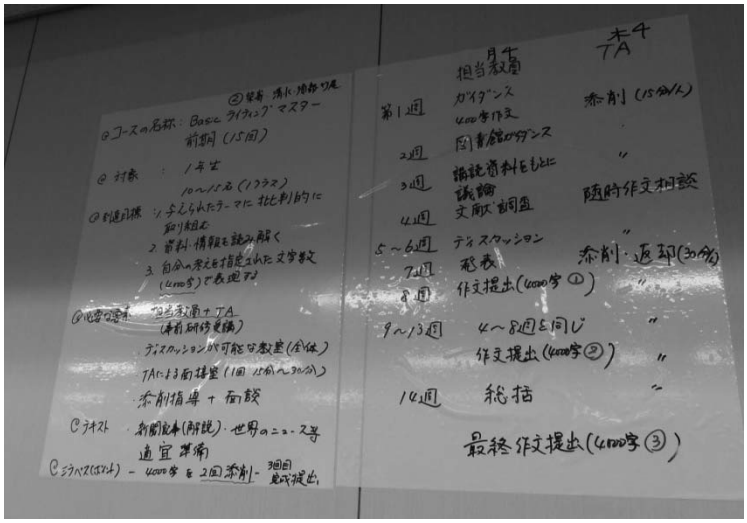
1. キャリア教育（生涯学習的観点）からみた「生きる力（コンピテンシー）」を発達させるためには、「ふりかえり（自己省察）」が重要となる。ふりかえりの深さは、「言語能力・文章表現能力」に依存する面がある。
2. 「文章表現能力」とは、「自分の意見を述べるための知識、自分の意見を述べるための考え方（考える力）」と捉えるべきである。この力は、就職活動でも必要となる社会的ニーズの高い力であり、初年次から授業を通じて育成すべきである。
3. 文章表現科目は「生きる力」と「考える力」の両方を育成する上で必要不可欠である。「考える力」を育成することは、結果として、深い自己省察を通じた「生きる力」を伸ばすことにつながるといえる。

第 10 分科会　大学におけるライティング指導の諸問題プロダクト

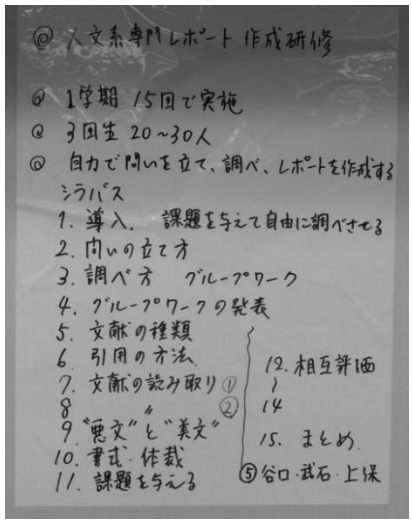
1 班~3 班：初年次教育

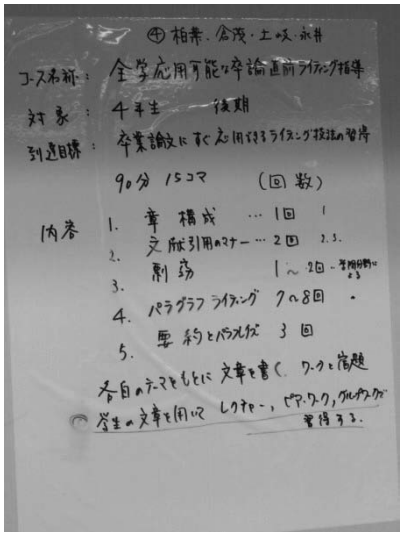


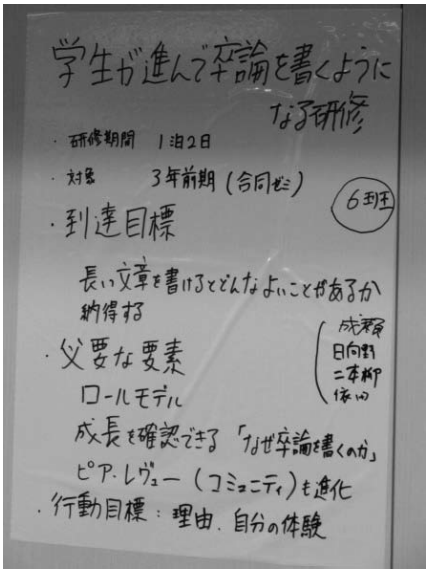




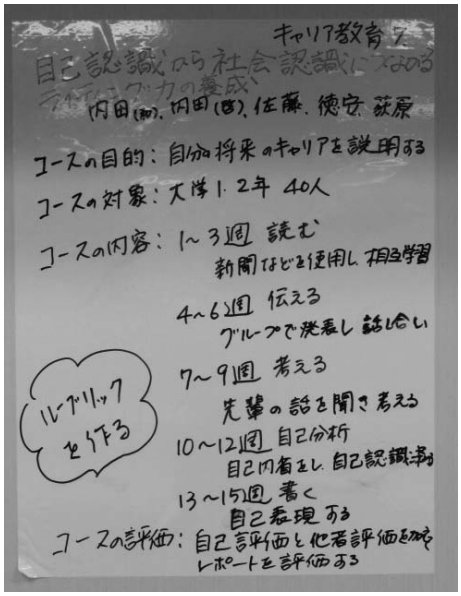
4 班～6 班：専門教育

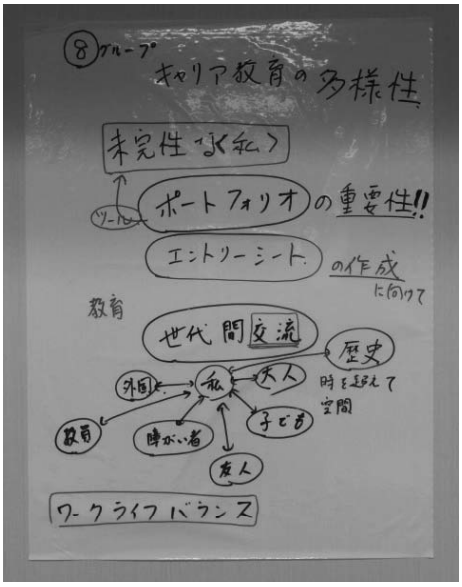


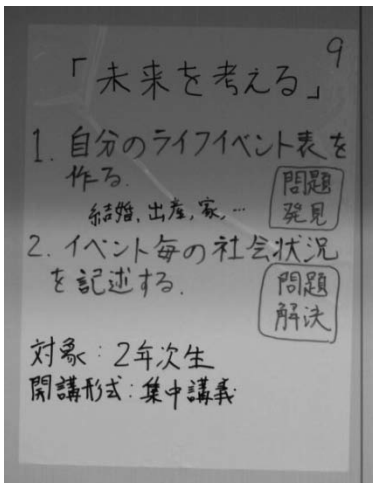



学生が進んで卒論を書くようになる研修
・研修期間 1泊2日
・対象 3年前期（合同ゼミ）
6班
・到達目標
長い文章を書けるとどんなよいことがあるか納得する
・必要な要素
ロールモデル
成長を確認できる「なぜ卒論を書くのか」
ピア・レヴュー（コミュニティ）も進化
・行動目標：理由、自分の体験

7 班~**9** 班：キャリア教育


キャリア教育 7
自己認識から社会認識になるコミュニケーション力の養成
内田(和)、内田(哲)、佐藤、徳安、荻原
コースの目的：自分の将来のキャリアを説明する
コースの対象：大学1・2年 40人
コースの内容：1~3週 読む
新聞などを使用し相互学習
4~6週 伝える
グループで発表し話し合い
7~9週 考える
先輩の話を聞き考える
10~12週 自己分析
自己内省をし自己認識する
13~15週 書く
自己表現する
ルーブリックを作る
コースの評価：自己評価と他者評価を加味
レポートを評価する


8グループ
キャリア教育の多様性
未完性な〈私〉
ツール
ポートフォリオの重要性!!
エントリーシートの作成に向けて
教育
世代間交流
歴史
外国
私
大人
時を超えて
空間
教育
障がい者
子ども
友人
ワークライフバランス


「未来を考える」9
1. 自分のライフイベント表を作る。
結婚、出産、家、…
問題発見
2. イベント毎の社会状況を記述する。
問題解決
対象：2年次生
開講形式：集中講義